

野口英世の彫像の研究（その2）^{*1}

水 川 秀 海^{*2}

要旨：その1に引き続いて今回は大阪府箕面公園に建立された野口英世像について述べる。

野口英世が大阪歯科医学校で行った講演に感激した学生の一人戸祭正男と、野口英世の母に対する孝養を目撃した琴乃家の女将南川光枝の協力により完成に至った経過やその背後にある史実等について述べる。

Key words：野口英世 Hideyo Noguchi, 銅像 bronze statue

大阪府箕面公園にある野口英世 ブロンズ立像について

昭和30年秋、歯科医師戸祭正男と料亭「琴乃家」の女将南川光枝の努力が結実して、大阪府箕面公園に野口英世のブロンズ立像が建立された。11月27日には盛大な除幕式が行われている。今回はこの像の建立に至る経過について述べる。話は大正4年秋、野口英世が母親あいたさに帰国した時にさかのぼる。

英世は大正4年9月5日横浜に上陸し、郷里福島を経て9月18日には再び東京に、9月23日東京歯科医学専門学校で講演し、10月7日に母、小林栄夫妻、血脇守之助と同道して関西方面への旅に出た。名古屋を経て10月8日伊勢神宮に参拝し、10月9日大阪に入った。10月11日には大阪高等医学校（現大阪大学医学部）で講演をしている¹⁾。

大阪高等医学校の校長は佐多愛彦である。

ここで大阪高等医学校と校長の佐多愛彦について述べておきたい。

大阪高等医学校は東京歯科医専の花澤鼎がかつて研究生生活を送った学校である。

明治35年、東京歯科医学院を卒業した花澤は、私立関西医学院と大阪高等医学校の前身である府立大阪医学校で組織・病理の研究生生活を送っている。この時佐多は府立大阪医学校の校長であった²⁾。

佐多は鹿児島医学校に学び、後に帝国大学医科大学選科を卒業して府立大阪医学校に赴任した。鹿児島医学校は、明治2年医学のドイツ移植を決定した時、英医ウィリアム・ウィリス (William Willis) の処遇に困り、東京から遠いが西郷の故郷である鹿児島に設立された医学校である³⁾。そして帝大医科大学は本科ではなく選科であるから佐多はいわゆる傍系の医学者であった³⁾。そして大阪医学校は明治20年、政府の公立医学校廃止策のもとでしぶとく生き残った学校である。

明治19年帝国大学令をはじめとする学校令公布にともない、医学教育は国が直接管理すべきだとする考えのもとに、明治20年9月、仙台、千葉、金沢、岡山、長崎の5校の県立医学校を官立に移行し、同時に“府県立医学校ノ費用ハ明治21年以降地方税ヲ以テ之ヲ辨スルコトヲ得ス”の勅令を出した。その結果それまで盛んであった公立医学校は大打撃をこうむり、ほとんどが廃校のやむな

^{*1} Investigations on the Statues of Dr. Hideyo Noguchi (Part 2)

^{*2} Hidemi MIZUKAWA, Hamamatsu-shi, Shizuoka Japan

きに立ち至り、わずかに愛知、京都、大阪の3校が生き残った。

佐多は府立医学校最初のドイツ留学生となり、帰国後の明治35年校長に就任すると、同校の充実に異常なほどの情熱をもやし、同時にねばり強く大学昇格運動をくりひろげた。

先づ明治36年1年半の予科を設置、校名を大阪高等医学校と改称し、この予科の年限を少しずつ長くした。大正3年には高等学校と同じ3年として、大学と専門学校に分れていた医学教育の一元化を主張した。大学は帝大のみとする当時の国の政策に真向から対立して医学専門学校の大学昇格の妥当性を広く社会に訴えた。かくして大正4年第二次大隈内閣の時について府立医科大学設立認可をとりつけた⁴⁾。時の文相は後に大隈の後をうけて早稲田の総長になった高田早苗である。これは「大学令」制定以前に大学昇格をはたした唯一の専門学校で、この既成事実が「大学令」制定の推進力となった。

血脇が英世を同道して府立大阪高等医学校を訪問したのは、かつて花澤が研究生を送った学校というだけでなく、このような佐多の運動にエールを送るためであったと考えている。

英世の帰国の旅は、渡米前にお世話になった人達への報恩の旅であると同時に、佐多のように、社会の逆風の中で闘い、努力する人達にエールを送る旅でもあった。

戦前の歯科医学教育は甚だ閑却されていた。闘う血脇の存在を無視してはならない。この点で『英世帰国の旅は北里研究所におけるものをのぞい

*1緒方六治 (1872~1950)

愛知県東谷金造の三男。幼時に三重県医師大国愼斎の養子となる。大阪緒方病院薬局勤務、明治28年上京し伊沢信平門下となる。同32年歯科医術開業試験に合格、緒方洪庵三男惟孝の養子となる。明治33年渡米、明治39年帰国し緒方病院歯科長、藤原市太郎の大阪歯科医学校設立に賛同、設立後校長となる。

*2荒木紀男 (1885~1974)

長野県出身、高山歯科医院の書生を経て、東京歯科医学院に学び明治38年に渡米した。奥村鶴吉の紹介で英世と同じアパートで生活、ニューヨークではポーセレンの名手として活躍していたが岡田満の紹介で松風嘉定と面談、帰国して松風陶歯研究所の設立に参加した。清水焼から碍子製造に転身した松風の高度な技術力と荒木の歯科技術の合流によって国産陶歯の道を拓いた。

昭和28年戸祭・南川による野口英世像建立の募金活動に参加し、銅像建立に尽力した。

て、地方の学会、実業家の会合、学生の会合だった』から『英世は日本の訪問から苦い思いを秘めて帰米した。帰国の旅は失敗に終わった』とするプレセット女史 (I. R. Plesset) の考えに⁵⁾著者は全面的には賛成でない。

大阪高等医学校で講演した翌10月12日には血脇守之助、石塚三郎、小林栄と同道して大阪歯科医学校 (現大阪歯科大学) を訪問して講演を行った (歯科関係の殆どの文献が11月12日となっているが10月12日が正しい)。

なぜ大阪歯科医学校を訪問したかについては二つの理由がある。一つは、大阪歯科医学校の校長緒方六治^{*1}がニューヨーク歯科医学校に在学中、荒木紀男^{*2}と共に英世と同じアパートで暮していたからで⁶⁾、もう一つの理由は、当時大阪歯科医学校と東京歯科医学専門学校が連携関係にあったからである。

大阪歯科医学校設立にあたって、藤原市太郎は東京歯科医専の病理組織学研究室の小野寅之助を訪問して講師就任を依頼した。小野は当時を回想して「当時、東歯にいた私が関西人であるという意味もあり藤原市太郎さん達から懇望されたが、諸種の事情があつてその望みに応じかねた。そこで、その代りに杉山盤三氏が花澤教室にて俄か仕込みをし、赴任して歯科解剖や歯科病理を担当した。その後、仁木剛、足立養一、遠藤壮七郎、岡田満、片山清一、藤井弘毅、加藤大次郎、榊原猷曹、竹村得三氏らが本学に関係していた」と述べている⁷⁾。

明治45年1月14日の大阪歯科医学校開校式に杉山盤三^{*3}は血脇守之助代理の奥村鶴吉と共に出席しそのまま大阪にとどまり教育陣に参加した。また大阪歯科医学校夏期講習会には花澤以下東歯教授が多数参加し、教科書は東歯専の講義録を使用する等大阪歯科医学校と東京歯科医学専門学校は深い関係にあった。

血脇が英世を同道して大阪歯科医学校を訪問したのはこのような関係にあった大阪歯科医学校が専門学校昇格を前 (申請は大正5年認可は同6年) にしていたのでこれを激励することになった。

英世の講演は蛇毒研究を中心とするものであつ

*3杉山盤三 (1888~1969)

明治44年10月東京歯科医学専門学校卒、東京歯科大学三代目学長杉山不二氏の長兄である。

た。英世は当時的大阪歯科医学校の貧弱な施設を見ても何一つみさげることなく、ロックフェラー研究所も机一脚、顕微鏡一台から出発した。この学校の発展は君達の努力にあると結び、専門学校昇格を目前にした大阪歯科医学校を激励した⁷⁾。

この講演を聴いた教職員、学生達は大きな感銘を受けた。後に箕面公園の野口英世像建立に奮起する戸祭正男もその一人である⁸⁾。

その夜英世一行は神戸に向い、翌日は母親と神戸市内を見物している。

野口英世の研究者である石原理年氏は、英世が多忙な日程を割いて訪神した動機について、山本神戸市医師会長が英世の恩師北里柴三郎と東大で同期であったこと、細見神戸医事研究会理事が英世と共に済生学舎で学ぶなどの繋りが重り合って実現したものと考えられるとしているが⁹⁾著者はさらに次の事をつけ加えたい。

野口英世帰国中の日程の決定者ともいえる血脇守之助が東京歯科医専花澤鼎教授の無二の親友で神戸市で開業していた藤井磯次郎氏（神戸市中央区開業の藤井沖正氏祖父）に神戸案内を託すことによって、母シカと親子水入らずの時間をとってやりたいと考えたからであろう。事実13日には藤井氏の案内で訪れた湊川神社で母子で鳩に豆をやる等親子水入らずの楽しい時を過している⁹⁾。

またこの時期の英世は、今までの研究にくぎりをつけて、新たな研究テーマを模索している時でもあった。英世は帰国の様子を師のフレクスナー（Simon Flexner）に「つむじ風のような旅」と書き送っているが、その多忙な日程を割いて新潟医専を訪問し、恙虫病の研究者川村麟也と対談したり、ワイル病の病原体の純粋培養に成功した千葉医専の伊東徹太を訪問している。研究生生活の転機にあることを知った血脇が、16年前検疫官としてニューチャンに赴く際に出航した思い出の神戸港に立寄ることによって初心忘るべからずという無言の教訓を与えると共に、今後も自信と勇気をもって新たな研究にチャレンジして欲しいという血脇の親心があったと思う。英世が最初に外国の地を踏んだのは清国のニューチャンである。この地に赴く際に支給された旅費を一夜にして浪費し血脇の工面で辛じて派遣団に合流出た。しかしこの地で英世は欧米医師団に伍して働き高く評価された。このことは英世に大きな自信を与え

ている。この意味でニューチャン時代は彼の人生にとって大きな意義を持っている。この時代なくして後の渡米はあり得なかったといっても過言ではない。神戸港こそ、世界で活躍する英世の出発点であった。

英世の伝記等で血脇守之助は英世のスポンサーと表現される場合があるが、これは適切な表現ではない。英世にとって血脇は東京の慈父である（小林は福島 of 慈父）。血脇にとって英世は孝行息子にして道楽息子なのだ。英世の師はフレクスナーでありスポンサーはロックフェラーである。

初心忘るべからずは別として、英世親孝行の場合は血脇の配慮とは別にその二日前に出現し、しかもそれが新聞によって全国に報道されることがあった。

英世が帰国した最大の理由は母シカに逢うためであった。当時わが国の学者として最高の荣誉であった帝国学士院恩賜賞（第9号）を受賞しても血脇が代理で受け取り故郷に錦を飾る動きを見せなかった英世が、親友石塚三郎の撮影した年若い母の写真を見て「ハハミタシ、ニホンニカエルカネオクレ」の電文を友人の星に打った話は有名だ。万里の波濤を越えて帰国した英世であったが、毎日講演会の連続で母子がゆっくりと過す時間はほとんどなかった。わが国を代表する学者、紳士を前にして講演することこそ、渡米前にお世話になった人々への報恩であり、母に対しては親孝行であるといっても、あまりにも、と思った佐多愛彦大阪高等医学校長が、英世が大阪入りをした10月10日、人里はなれた箕面公園にある琴乃家に昼食の席を用意し、英世親子一行を招待した。この席には老母に舞を見せるために関西一の名妓、富田屋（南区宗右衛門町）の八千代が呼ばれていた。

ここで英世は出される料理の一つ一つを説明しながら、自ら箸をとって老母の口に運んだ。田舎で農業に従事していた母は、椀の蓋一つとれないかもしれない。母に恥をかかせたくないと思った英世の咄嗟の行動であったろう。周囲の人がこの英世の行動をどう受け取ったかは別として、同席した佐多博士、福原義柄博士、木下東作博士ら全員が英世の孝心に感激した。特に八千代は「あれほどの偉いお方が周囲に並ぶ先生方など眼中になく、ひたすら孝養をつくされている」と女将と共に涙を流した。翌日「琴乃家における野口博士の

孝養」として情景がこまかく報道されて全国的な話題となった。

話はいきなり戦後となる。昭和24年東京有楽座で新国劇「野口英世」が演じられた。和田勝一作、関口次郎演出、野口英世役辰巳柳太郎、母シカ役は久松喜世子であった。内容は、大正四年の英世の帰国が舞台である。クライマックスは琴乃家のくだりで、辰巳柳太郎と今は亡き久松喜世子の名演技で観客の紅涙を絞った。

英世の人気は戦後高まるにつれて奮起したのは「琴乃家」の女将南川光枝であった。彼女は英世が「琴乃家」を訪れた時の女将の妹で当時姉を手伝っていた関係で彼女自身も英世の孝養を目にした一人であった。偶然というべきか、運命であろうか、彼女の歯科主治医がかつて大阪歯科大学で英世の講演を聴いて感動した戸祭正男であった⁸⁾。戸祭から英世の偉業を詳しく説明された光枝はますます欽仰の念を抱いた。その後、南川・戸祭の英世に対する尊敬の念は銅像建立に進み、南川は琴乃家支店建設用地を売却、その全額を住友銀行箕面支店に口座「野口英世博士銅像建設資金」として開設した。昭和28年戸祭と南川の両名は野口記念会を訪れ、銅像建立の協力を求め、吉田三郎氏には上野博物館前と同ポーズの野口英世像作製を懇願した。これと併行した戸祭正男、石塚三郎、荒木紀男らによる募金行脚はよく箕面町を動かし、箕面町議会は「野口博士銅像建立募財趣意書」を作成して府下有志、児童らに募金を求めた。しかし募金は順調には集まらず、粘土塑像は完成したが資金不足で鑄造に至らない等の紆余曲折の末、昭和30年秋ようやくにして完成し11月に福知山線川西池田駅に到着した。そこから先は箕面町坂本利一氏の牛車で搬送された。町、建設会共に搬送費は無く、坂本氏は野口博士の人柄と、銅像建立に係る人々の熱意に感動して無料で引き受けた。11月22日阪急箕面駅前広場は牛車を待つ人で駅開設以来の人出であったという。牛車が到着すると花火が打ちあげられ、牛車に標旗がたてられ、紅白によられた綱二本がつけられこれを地元の児童が曳いて滝道を登り現場に到着した¹⁰⁾。

11月27日に除幕式が行われ、福島秀策東京歯科大学学長も出席している。除幕式に続いて建立場所より滝道を少し下った修験道霊場瀧安寺（ろ

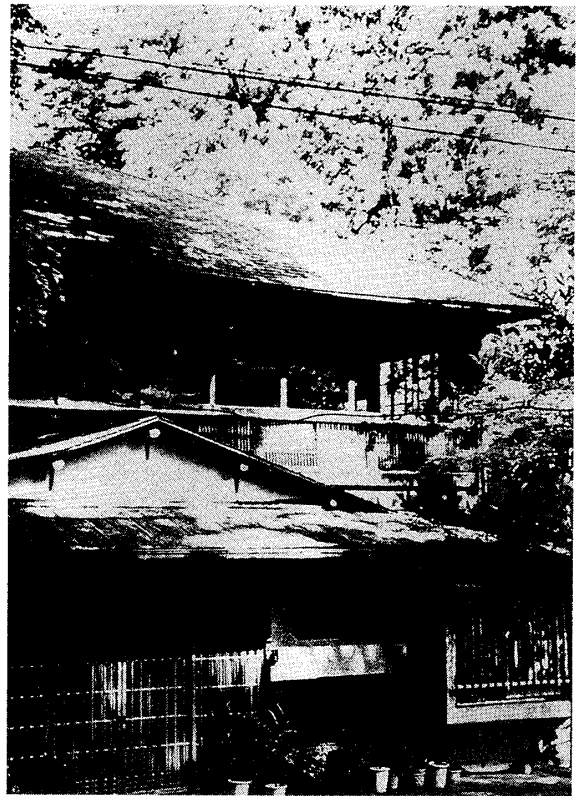


図1 琴乃家

うあんじ、通称箕面寺、役小角の開基)の広場で記念式典が催された。この式典で、この像のためにつくられた「母子舞扇」が児童によって合唱された。

1. 故郷遥かに思いは千里
ロックフェラーの顕微鏡に映る
恋し面影やつれた写真
愛の手紙よ母は倅せか
2. 略
3. こゝは大阪錦路箕面
滝の白珠あの琴の家
手振り床しや八千代の袖を
なぜに濡らすか母子舞扇

作詞は沖正人大阪府立春日丘高校英語教諭である。銅像の立った地はその後錦溪谷と名づけられて箕面公園八勝の一に数えられている¹¹⁾。

箕面溪谷は阪急箕面駅近くにあり、溪谷にそって箕面滝に至る滝道がある。駅より滝道に出てこれを登ること約30分、谷いよいよ深くなった所に溪谷に下るゆるやかな道があり、その先に琴乃家がある。現在は株式会社その興産箕面保養所と

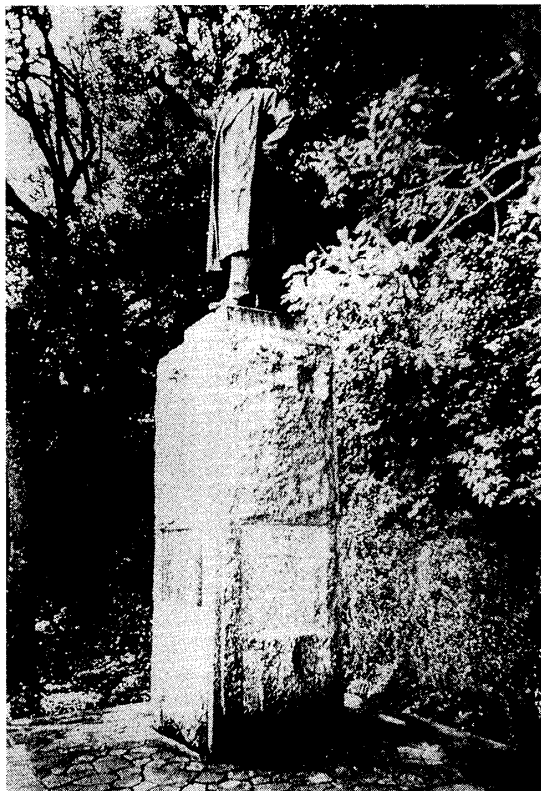


図 2 大阪府箕面公園にある野口英世の銅像

なっているが外観は往時の姿をとどめている（図 1）。

崖側には野口英世像の由来板が立てられていて、そこからつづら折れの細い道を登った小高い所に白衣を着て試験管をかかげた銅像（等身大一割増の 170 cm）が琴乃家に向かって立っている。銅像は滝道からもよく見える。台座は大きな四角柱の御影石で正面に「野口英世博士像」の銘板、その下に赤間文三大阪府知事の撰文が嵌められている。側面には建設委員会名が刻まれているが、彫りが浅く現在判読は困難となっている（図 2）。

ま と め

今回数ある野口英世像のうち、特に歯科界と関係の深い東京歯科大学水道橋病院にあるブロンズ立像と、高山紀斎胸像をバックに血脇守之助と並んで立つ野口英世の肖像画、大阪府箕面公園にある野口英世ブロンズ立像を中心にその製作に至る経過や背後にある史実等について述べた。

かつてロックフェラー医学研究所で「眼らざる人」といわれた野口英世は、今銅像となって世界各地で多くの人を勇気づけている。

英世がわが国で人気が高いのは、かつてわが国

が学歴社会であったことに関係がある。奥村鶴吉は野口英世を評して「なんら規則立った医学教育を受けず、否、普通教育すら碌に受けなかった野口さんが、今日に於て世界的に名声を轟かすことになって、大学教育果して何の権威ぞという誇りを恣にすることは我々不規則教育党のために気を吐く万丈というべきである」と述べている¹¹⁾。

また戦前、成功の秘訣は「運、根、鈍」とよく言われたが、英世はまさにその見本的人物であった。良き人に邂逅し、努力し、耐忍強くこの世を生きることによって成功した実在の人物であった。

米国で英世が人気があったのは、金もうけの医学というイメージだけが強かった米国医学が、1900 年頃から上昇気流にのり、ヨーロッパの医学に追いついた¹²⁾。世界の医学会における米国旋風を中心にロックフェラー医学研究所があり、そこには、人類のために命がけて仕事をする野口英世がいたからだ。

しかし、それだけで英世人気の迷は解けない。プレセット女史の『野口英世』⁹⁾の訳者はそのあとがきの中で「いろいろの欠点や、問題はあっても野口英世ほどアメリカ人の魂をゆさぶった日本人は他にあまりないということに尽きる……すぐれた学者あるいは外交官が多数米国で活躍してきたがついに野口に及ばないという観があるのは、どういことであろうか。従来の野口伝記は、多くの日本人を発憤させたであろうが、野口がアメリカ人の無意識をゆさぶる不思議な力を説きあかすものではないように思う」と述べている。

歯科医師を含め多くの日本人がアメリカを目指すようになった今日、新しい視点で野口英世の研究が重要である

稿を終るにあたり、ご指導を賜った日本歯科医史学会理事森山徳長先生、松本歯科大学校 重夫教授、野口英世記念会関山英夫先生、ご教示をいただいた玉川大学教育博物館学園資料室中村幸吉先生、メキシコ大使館の皆様、神戸市中央区開業藤井沖正先生、竹中工務店総本店広報鈴木玲子様に深謝いたします。

文 献

- 1) 野口英世記念会(編)：フォトドキュメンタリー—人類のために 野口英世、野口英世記念会、1996
- 2) 東京歯科大学百周年記念誌編纂委員会(編)：東京歯科

大学百年史，東京歯科大学，1991

- 3) 東京大学医学部創立百年記念会(編)：東京大学医学部百年史，東京大学，1967
- 4) 天野郁夫：近代日本高等教育研究，玉川大学出版部，1989
- 5) イザベル・R・プレセット(著)中井久夫，折矢好弘(訳)：野口英世，星和書店，1987
- 6) 榊原悠紀田郎：歯記列伝，クインテッセンス出版，1995
- 7) 大阪歯科大学史編集委員会(編)：大阪歯科大学史一，大阪歯科大学，1981
- 8) 今田見信(編)：続・歯学史料，医歯薬出版，1972
- 9) 石原理年：神戸を訪れた野口英世，医譚 61：25-32，

1991

- 10) 石原理年：野口英世箕面銅像，搬送，除幕者と由来板の変遷，医譚 60：1-10，1991
- 11) 岡本清纓：歯界遍歴六〇年，医歯薬出版，1984
- 12) R. H. シュライオック(著)大城 功(訳)：近代医学発達史，創元社，1951

著者への連絡先：水川秀海

〒 432-8023 浜松市鴨江 2-50-301

Tel 053-456-1948